会員随想

文化勲章授章記念寄稿
「六中時代」

中17回　松尾敏男（日本画家）

私が通っていた大久保小学校は新宿に近かったおかげか、当時中学界の器械体操の名門であった府立六中の選手の人たちが来て体育館で全校生徒を前にして模範演技を見せてくれた。中学体操界のトップと言われた二條さんがキャプテンで、当時体操に熱中していた私はどうしても六中へ進んで運動を続けたいと思い、幸い合格してあこがれの六中生になったのである。

入れ違いに卒業された二條さんを始め、高師で活躍しておられた岸野先輩なども指導に来てくれて、器械体操漬けの中学生活は充実した思いで過ごすことができた。ちなみに私も二年生の時、東京市の中学校学年別大会の鉄棒の部で優勝し、朝礼の時全校生の前で二階校長から賞状を授与されたが、その後はさして成績も上がらず、それでも年の功もあって体操部のキャプテンとなり、相変わらず勉強そっちのけで夕暮れまで校庭で体操に明け暮れていた。

四年生の時太平洋戦争が始まったが当初はそれ程の緊迫感もなく、時々申し訳程度に軍需工場への勤労奉仕に動員されるくらいで、まだ空襲もなく（一度だけドゥリットル飛行隊による昼間の二～三機による空襲があったが、飛行機が通り過ぎる頃やっと警報のサイレンが鳴る始末であった）平穏な学生生活を送っていた。

好きな授業は体操の他では図画の時間であった。絵を描くことは子供の頃から好きで家では勉強より絵を描く時間が多かった。小学校一年の時、何故か指名されて学校代表で絵を描いて当時の東京市小学校のコンクールに出品したこともあった。会場は新宿三丁目の交叉点角にあった「ほてい屋百貨店」で場所は今の伊勢丹の所である。当時伊勢丹はまだ小さい店で裏の方にあり、その後ほてい屋を買収して大きくなっていった。

同じく小学校時代、美術の先生から「君、絵描きさんにならない？」と言われたこともあったが、当時は体操への夢が強かったのでそれ以外の道は考えられなかった。それでも六中で唯一プレッシャーのない授業と言えば体操と美術の時間で、体操は日高畝千代先生、小島栄太郎先生、そしてターザン事坂井田逸治先生であり、美術は石川要重先生が主であった。嘱託の廣本了先生も週の何日かは来ておられたが、嘱託なので授業の時間に合わせてこられるためか、我々が校庭で体操や教練をやっているとき登校してこられたり、また下校して行かれたりと目立たぬ姿であった。しかし、誰れ言うとなしに廣本先生は美術学校卒業の時は銀時計をもらわれたとか、文展でもう特選を受けた偉い絵描きさんだと噂される存在であった。

一方石川先生は話が面白く、我々が要求すると美術の一時間を先生独演の漫談会にしてくれて、又それも楽しい授業であった。

昭和十七年、十六歳の五年生の時、突然身体に変調が起こった。夕方になると微熱で身体が重くなる。深く息を吸うと胸の横あたりがヅキンと重い痛みが走るので病院に行った。診断は簡単で急性肋膜炎。すぐその場で馬の注射かと思うような太いものを脇腹に刺されてかなりの黄色い水を吸い出され、しばらく

の安静を言いわたされたのである。勉強が嫌いで余計に分からなくなった授業から逃げられると早速休学届を出した。病気なら仕方がないと浅羽先生に許可され、これから安静にするので好きな映画も見られなくなると、最後の思い出に映画を見ておこうと熱っぽいまま新宿文化劇場へ入った。当時映画館は空気が悪いので結核患者は行ってはならぬと信じられていた時代である。

映画はフランス映画の「別れの曲」。正にしばしの別れにふさわしい題名であった。ショパンの伝記映画で、当時人気のジャン・セルヴェと許婚者にジャニーヌ・クリスパン。余談だが、この映画で主題曲のように使われた作品十の三の練習曲がその後映画の題名のまま「別れの曲」と通称され現在に続いている。

家にいてすることもない。時間つぶしのつもりで家にあった絵葉書を見て墨などで模写しているうちに段々絵への魅力が大きくなっていったようである。今度は積極的に古本屋で「南画の描き方」を求めて本格的に筆で描き出した。その時不思議な気持が湧いた。自分で描いている山水の中に自分が画中人物として存在しているかのような感覚がそれであった。自分の周辺に森を感じ、水の音を聞き、連なる山々の麓を実感する不思議さ。今まで経験したことのない充実感があった。

一歩進んで「日本画の描き方」という本も見つけた。当時の一流の作家達がいろいろな分野を受け持った手ほどきの本。そこで初めて日本画の材料を知り、手探りの状態ながらその世界への扉をたたいたのである。そこで感じたもう一つの思い。絵を描いている時の時間の流れを全く意識せず、途切れることのない充実感を持ったことの喜びのようなもの。それは体操漬けのそれまでの自分も感じたことのない感覚だった。

「真実に生きる」それがどういう事か結論を生み出すことの出来なかった自分にとって、真実に生きることの具体的な形、それは私にとっては「絵を描く」ということと自覚出来たときと言ってよいだろう。経済への不安なども忠告されたが全く意に介さず畳の上で死ねなくてもよいと決心した。

生涯修業の道を歩こうとの思いから美術専門学校への進学も考えなかった。絵は教わるものではない、自ら求め続ける道であるとの確信からだった。

昭和十八年三月、六中卒業。式のあとAクラスの皆が校庭で輪を作り、一人一人がそれぞれの進路を発表した。高校に受かった者、もう一年補習科に通って再度受験をする者。私の番が来て私は宣言した。「僕は日本画家になります」そして持参した自筆の式紙を見せた。竹葉に向かって飛ぶ雀の絵であった。風がいかに強くとも飛び続けようとの気持であった。どのようにすれば画家になれるか、何も考えつかぬまま、その宣言で自分の退路を断ち、今までまともに自分の人生と向かい合うことのなかった私が未来に直面した決断の時であった。

◆松尾敏男氏略歴◆

府立六中17回生（昭和18年卒業）
大正15年3月9日　長崎市生まれ
昭和24年　『埴輪』で院展初入選
昭和37年　院展奨励賞
昭和41年　院展日本美術院賞
昭和46年　日本美術院同人に推挙
昭和50年　院展文部大臣賞
昭和54年　『サルナート想』で日本芸術院賞
昭和57年　日本美術院監事に任命
昭和62年　多摩美術大学教授
平成6年　日本芸術院会員
平成12年　文化功労者
平成22年　公益財団法人日本美術院理事長
同年　日本芸術院第一部（美術）部長
平成24年　文化勲章受章

代表作
昭和45年　第55回院展「樹海」文化庁買上作品
昭和46年　第一回山種美術館展で『翔』優秀賞
昭和47年　『海峡』で芸術選奨新人賞